

「教条主義の母, フランス自由主義の母」が意味するもの

—第三共和政期のジェルメン・ド・スタールとオルレアニズムの再生—

What do "the Mother of Doctrine and the Mother of French Liberalism" mean?
—Germaine de Staël and the Rebirth of *Orléanisme* in the Third Republic—

武田 千夏¹

¹大妻女子大学比較文化学部

Chinatsu Takeda¹

¹Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：ジェルメン・ド・スタール，政治的自由主義，第三共和政，
ジェンダー，オルレアニズム

Key words : Germaine de Staël, Political Liberalism, Third Republic, Gender, *Orléanisme*

抄録

第三共和政以来，フランス政治思想史研究においてジェルメン・ド・スタールには「教条主義の母」「フランス自由主義の母」という二つの呼称があった。ブロワ伯爵らオルレアニストとの関係性を重視した場合「教条主義の母」，Bコンスタンとの政治思想的親和性を重んじた場合「フランス自由主義の母」と呼ばれた。スタールの脇にいた著名な男性の思想家，政治家のうちの誰に焦点を置くかによってスタールの呼び方も異なるという状況は，フランスの男性知識人が政治思想家としてのスタールの独自の立場を軽視した史実を示す。本論文では主に第三共和政期のフランスの男性知識人によるスタール論を取り上げ，自由主義者の一派オルレアニストの「女嫌い」の傾向が「教条主義の母」「フランス自由主義の母」という呼称につながっていったこと，そして「女嫌い」のベールの背後でスタールの政治思想がオルレアニストに対して実質的な影響を及ぼし1930年代の議会主義の危機の時代に「教条オルレアニズム」が再生したこと，その結果第三共和政の時代にフランスで自由主義思想が健在だったことを明らかにする。

はじめに

フランス革命期とナポレオン帝政期に活躍したスイス系フランス人で女流作家として知られていたジェルメン・ド・スタール (Germaine de Staël) が政治思想史の領域で「(フランス)自由主義の母」と呼ばれるようになって久しい。¹1970年代以後マルクス主義に変わって修正主義が台頭しフランス自由主義思想研究への関心が高まると政治思想家としてのスタールも注目されるようになった。¹しかしながら本国フランスで「(フランス)自由主義の母」という呼称が生まれたのはそれ以前のことだった。

「(フランス)自由主義の母」の名付け親は，戦間期を代表するフランス文学評論家，政治評論家で，フランスにおける政治思想史の創始者としても知られたA・チボーデだった。²ヨーロッパ大陸がファシズムの危機に瀕した1930年代に，チボーデはフランス自由主義思想を見直し再定義するために，スタール，B・コンスタン，教条主義者などの19世紀フランスの代表的なリベロー（自由主義者）の政治思想を掘り起こした。この文脈においてチボーデはスタールを「教条主義の母」および「フランス自由主義の母」という異なる二つの呼称で呼んだ。

本論文の目的は、チボーデが名付けた「教条主義の母」と「フランス自由主義の母」に付随する政治思想史上の認識を明らかにすることによってこれらの呼称に込められた「女嫌い」の感情をあぶりだすことである。さらに、スタールの寛容、中庸の精神を軸としたリベラリズムが第三共和政期のオルレアニズムの再生に大きく貢献したが、この史実は第三共和政の男性知識人の「女嫌い」の傾向によって不可視化されていったことも明らかにする。³

スタール研究における「女嫌い」の分析、というのは新しいテーマではない。日本でも主に女性研究者によってスタール研究に潜む「女嫌い」の傾向が指摘されてきた。佐藤夏生氏はフランスで過去200年スタールの業績が軽視されてきた理由について「スタール夫人は今日にいたるまで先入観、誤解、それからフランス文化の底に潜んでいるミゾジーヌ（女嫌い）の餌食にされてきた。女である以上、金持ちであってはならないし、時の権力者に追放されるほどの社会的地位を占めるべきではない。男好きの名流夫人などもってのほか、という訳だ」と書いている。⁴ 工藤庸子氏はM・ヴィノックをはじめとするフランス人男性研究者によるスタールの評伝に恋愛沙汰の比重が大きすぎることを嘆いている。そして「私生活の波乱より知性の歩みを重視した」スタールの評伝として『スタール夫人と近代ヨーロッパ』（2017）を発表した。⁵ ちなみに工藤氏の評伝の副題にも『フランス革命とナポレオン独裁を生きぬいた自由主義の母』（傍点は筆者）とある。⁶ ではなぜスタール（夫人）は「自由主義の思想家」ではなく「自由主義の母」と呼ばれるのだろうか。女性が思想を紡ぐ時「母」という言葉を使う必然性があるのだろうか。

以上の問題意識から本論文を次のように構成した。第一に、スタール＝「教条主義の母」および「フランス自由主義の母」という呼称を1889年から1932年までのスタール研究の歴史的系譜の中に位置付け、それらの思想的意味についてあらためて問いただす。第二にこれらの二つの呼称は戦前にとどまらず第二次世界大戦後のフランス自由主義研究、スタールの政治思想研究にも影響を及ぼしたことについて、主にL・ジョームの研究を例に挙げて説明する。第三に、戦前と戦後のスタール論についての考察から「教条主義の母」「フ

ランス自由主義の母」という表現には多少なりともフランス人の男性研究者に特有な女嫌いの感情が込められていたことを指摘する。第四に、第三共和政期には「女嫌い」の傾向に加えて「ジェンダーフリー」なスタールの政治思想研究も誕生したこと、そしてその流れを汲んだ最近の研究動向についても紹介する。

本論に入る前に、あらかじめ本論文の主要テーマの「女嫌い」「ジェンダーフリー」についてあらかじめ定義しておく。先に「女嫌い」をミゾジーヌと称したが、これはフランス語の形容詞 *misogyne* であり、英語ではミソジナス *misogynous* となる。西欧思想史における「女嫌い」とは、西欧女性が西欧男性の被支配者であったこととそこから解放をめざしたこと、この二つの弁証法的な関係性の中で発展してきた極めて歴史的な概念である。したがって「女嫌い」の内容は時代によって大きく変わるが、ここで問題としたいのは20世紀前半の「知識人」と呼ばれるフランス人男性の「女嫌い」についてである。

以上を念頭に置きつつ、上野千鶴子氏による以下の2点を本論文の「女嫌い」の定義とする。第一に「女嫌い」とは「男にとっては女性蔑視、女にとっては自己嫌悪を意味する。」⁷ 第二に「女嫌い」とは好きの裏返しとしての嫌いという感情を伴うものである。2つ目の点の本論文において特に重要なポイントである。スタールについて論じた第三共和政期の男性評論家たちはそもそもスタールに関心を持っていなかったら、自分たちよりも100年以上も前に生きた女流作家の評論を書くことなどありえなかったからである。彼らの「女嫌い」は常にスタールに対するある種の尊敬の念と裏腹な関係にあったはずである。

これらの条件に加えて、上野氏は「女嫌い」がファタルな要素であることを強調する。⁸ ファタルとは、人類が避けて通ることのできない、というほどの意味である。上野氏によれば「性別二元制」のジェンダー秩序に深く埋め込まれた核が「女嫌い」である以上「女嫌い」から「逃れられる者はいない」という。⁹ 本論文はこの考えに内包されたラディカルフェミニズムには賛同しない。女性礼賛と蔑視の両極面を備えた態度を「女嫌い」と呼ぶなら、その対極に「女好き」ではなく、あらゆる社会的、文化的な性差を超えた普遍的な「人間」を位置付けたい。ジェンダーを超えたより抽

象度の高い「人間」の基本的な権利、つまり人権の視点に立てば、男女およびそのどちらにも属さない人も「女好き」「女嫌い」の感情を超越する。そうしたリベラルフェミニズムをここでは「ジェンダーフリー」と呼ぶ。

最後にジェンダーフリーの立場を重視する視点から、本論文では「スタール夫人」というジェンダーが色濃く反映された従来の呼称を使わず、ジェルメン・ド・スタールもしくはスタールと呼ぶ。

1. E・ファゲとA・ソレルのスタール論

1789年から第三共和政が成立するまでの約1世紀の間にフランスは度重なる革命やクーデタを経た結果、三つの立憲君主制、二つの共和政、二つの帝政を経験した。¹⁰そしてコミューン勃発後に第三共和政が樹立されたが、それはそれまでの100年間とは対照的に長期に安定した政体となった。

第三共和政が成立した当初、議会では王党派が過半数を占め、虎視眈々と王政復古の機会をうかがっていた。そのきっかけが訪れたのは1873年だった。それまで王党派はオルレアニスト、正統王朝派（レジティミスト）の二派に分裂していたが、オルレアニストがブルボン王朝の末裔であるシャンボール伯爵を唯一の王位継承者と認めることで両者は一致し、議会は共和主義を目指す政府を辞職させたからである。ところが最終的にシャンボール伯爵が三色国旗とリベラルなオルレアニスト寄りの憲法を拒絶した結果、王政復古の計画は頓挫し、議会共和政が確立した。

そのため第三共和政の成立は偶然によるところが大きかったと言えるが、同時にそれは必然的結果でもあった。フランス社会の民主化、自由化の動きはすでに1860年代に加速化しており、1870年代には旧体制への後戻りは事実上不可能だったからである。¹¹1860年代のフランス社会の自由化を背景に世論ではスタールの作品が再度高く評価されることになったが、それは彼女の自由主義政治思想がこの社会の変化を下支えしたことの証でもあった。¹²ところが1870年にフランスがプロイセンとの戦争に敗れた結果、フランス世論はスタールに対して、突如厳しい目を向けた。スタールは「ドイツ文学や文化を初めてフランスに紹介し、ロマン主義をフランスに伝えた作家」だったため、19世紀末のフランスにおいては反愛国的な作

家という烙印を押されてしまった。その結果19世紀末から20世紀初頭にかけて、フランス・ロマン主義研究からスタールの名前が消えた。¹³

また第三共和政期のフランスはフランス革命史の分野においてもスタールを集合記憶から追いやった。その理由は恐怖政治以後一時的に穏和な共和政を受け入れたにしろ、一般的に立憲君主主義者、自由主義者として知られてきたスタールには共和主義とは相容れない部分があったためだった。スタールは父親のJ・ネッケルが財務総監として国王にイギリス風議会の制度の導入を助言し拒絶された1789年6月23日をフランス革命における自由な局面のピークとみなし、それはバステューの襲撃を持って終焉したとした。¹⁴一方第三共和政期の多くの共和主義者も暴力と流血のイメージを呼び起こすバステューの襲撃自体に対してはスタールと同様に距離を置いたが、それから一年後の1790年7月14日の第一回全国連盟祭（革命1周年式典）についてはフランスや正義への愛のもとにすべてのフランス人市民が一堂に会した祝典だったとして、これを国民の祝日とすることに合意した。¹⁵このように両者は革命の凶暴な側面を拒絶した点では共通したが、スタールがバステュー襲撃前の政治改革的局面を重視し、共和主義者はその後を重視した点で両者の立場は微妙に異なった。穏和な共和主義者のフランス革命についての見方はスタール以上にV・ユーゴーやJ・ミシュレに近いものだった。¹⁶それとは対照的に一部の急進的な共和主義者たちは恐怖政治についていすもフランス革命の遺産とみなした。その代表格のG・クレマンソーが「フランス革命はそこから何も外す事のできない一つの塊である」と説明したことはよく知られている。¹⁷

1917年のロシア革命以後、急進主義的な共和主義派の歴史家はさらに左翼傾向を強め、マルクス主義的フランス革命史を確立させた。A・マチエはフランス革命を「社会階級間のショック」G・ルフェーブルは「貴族の陰謀説」とみなした。これらの代表的なマルクス主義派の歴史家は恐怖政治を積極的に肯定し20世紀のソ連邦の歴史的ルーツとみなすとともに、スタールの自由主義的フランス革命史の解釈に真っ向から対立した。¹⁸

最後に、ジェンダーの視点からスタールに批判的な第三共和政期の歴史家も多かった。M・フーコーによれば、第三共和政期には自伝、医学、法的

資料などが重宝されたという。これらの資料は社会的規範を踏みはずした人は精神的にも常軌を逸脱した人であると強調することによって、彼らを批判することによって社会統制を強化する政治的意図があったという。このような傾向はスタールの評伝にも見うけられた。P・ゴーチェはナポレオンとスタールの間の伝説的な政治的不和の元凶について論じるにあたって、両者の政治的および哲学的違いについては一切触れずに、スタールの恋心がナポレオンに受け入れられなかったためとの極めて感情的な結論を出した。この解釈の背後にはスタールが女性として良妻賢母のステレオタイプ像から逸脱していたとの批判的認識があったためであると考えられる。¹⁹

このように、ロマン主義、共和主義的フランス革命史、家庭に収まらない女性、という視点から見ると、第三共和政成立期のスタール像は総じて否定的なものにならざるをえない。しかしスタールに対して相対的に好意的な見地から論じる一部の知識人も存在した。それは共和主義と立憲君主政の違いを絶対視せず、自由と秩序を樹立するという立場から、王政か共和政かにこだわることなく第三共和政を受け入れたリベロー (libéraux, 自由主義者) たちだった。リベローの定義としてここでは「政治的中道主義、左派右派の穏健派を集めたグループ」という19世紀初頭以来の政治社会学的概念を採用する。²⁰これを政治理論的に説明すればリベローの政治目的とは「革命の遺産を維持すると同時に二つの形の専制と対峙する」となる。²¹「二つの形の専制」の内容は時代が進むにつれて変化した。フランス革命期の頃は旧体制への逆戻りと恐怖政治を意味したが、1930年代までにそれはファシズムと共産主義を意味することとなった。

その結果「革命の遺産を維持すると同時に二つの形の専制と対峙する」というのはフランス自由主義政治思想の核心的な考え方となっていく。ジョームは19世紀フランス自由主義思想において文明史の中で有機的に発展していった「自由」の概念を重んじたギゾーの「国家のリベラリズム」と国家からの個人の倫理的自由を立憲主義によって確立しようとしたコンスタンやスタールの「主体のリベラリズム」の二つを明確に区分した。²²確かに個人の倫理的独立性と文明史の中の自由論を折半させたスタールのリベラリズムには、反個人

主義的で国民主権を「理性の主権」に昇華させたギゾーの「国家のリベラリズム」とは相容れない部分がある。またスタールは中産階級と伝統的な貴族階級を折衷させた「開かれたアリストクラシー」の存在を自由の象徴として重んじた。一方ギゾーはあくまでもフランス革命の結果政治的権利を獲得した中産階級を中核としたリベラリズムを発展させた点でも異なる。

ジョームやJ. ジェニングスらの研究者は第三共和政期の自由主義の雛形をギゾーが活躍した7月王政に求めた結果1870年以降のフランスの政治文化においても「国家のリベラリズム」(もしくは反個人主義的で地方名望家によるリベラリズム)が一人勝ちをしたと解釈した。²³そうであるなら第三共和政の時代にリベローがギゾーではなくスタール論を取り上げたことをどう説明したらいいのだろうか。上に述べたギゾーとスタールの間の似て非なる思想的相違を考慮すると、第三共和政=ギゾーの勝利とみなすことによってこの時代の自由主義の多様性を見逃してしまう危険性があると思われる。従って本論文では第三共和政期のオルレアニストを中心としたリベローによるスタール論を取り上げることによってこの時代のリベローの多様性についても探っていきたい。

ここで最初に取り上げるのは、オルレアニストの代表的論客とも言えるE・ファゲ(1887)とA・ソレル(1890)によるスタール評論である。²⁴この頃のフランスとは、王党派と共和派の対立がひとまず終焉したがドレフェス事件によって新たな社会的亀裂が生じる前の、いわば嵐の前の静けさのような状態だった。そして1906年の政教分離法成立前夜のこの時代に、人々は政治と宗教の関係に敏感になっていた。このテーマは当然政治的自由主義思想の核心テーマであるため、この時期政治的自由主義に対する関心が高まりつつあったと言えよう。

E・ファゲ(1847-1916)は文学を専門とする大学教授、文学、政治評論家で、後にフランスアカデミーのメンバーにも任命された。彼はもともとオルレアニストでスタールの子孫とも親しかったが、共和主義が成立するとそれを受け入れた。ファゲは1887年にリベラル派の代表的な雑誌 *Revue des Deux Mondes* (tome 83, 357-394)に『スタール夫人』(« Mme de Staël »)と題する40ページに及ぶ文学評論を発表した。²⁵ファゲはスタールを「女流思想

家」とみなし、「思想、それも存在しうる可能な限り多様なジャンルの思想全てに果てしない知的関心を示す思想家」と定義した。²⁶ 一方ファゲはスタールについて「フランス政治思想史で著名な人物だが、文学以外の分野で、スタールについて論じられることはほとんどない」と指摘し²⁷、「同時代人に全く読まれなくなってしまった」スタールの「文学、政治、哲学的思想について定義」することが彼の評論の目的であるとした。²⁸

ファゲはリベラリズムとスタールの関係については次のように書いている。「スタールは人生をこよなく愛し、孤独を嫌い」、「個人主義者」であり、「リベラルである以前に個人主義者だった。」ファゲがスタールのリベラリズムに対してためらいがあったのは以下の引用からも明らかである。²⁹「スタールは感情によるリベラルだった」が私たちは「歴史の考察、この純粹でそっけない知識、つまり自由が文明に由来するという、理性によるリベラルとなりうる。」³⁰ ここで暗にファゲは「主体のリベラリズム」ではなくギゾーの「国家のリベラリズム」に軍杯を挙げている。³¹

だからと言ってファゲはスタールの政治思想を否定したわけではなかった。彼はスタールの「歴史、政治、道徳に関する思想は時が経ってもその存在感は変わらず、決して時代遅れとはならない」と書いた。³² では第三共和政の元でも有効なスタールの政治思想とは具体的に何を指すのだろうか。この問いに対して、ファゲはそれがスタール特有の「リベラルな心性」であると答え、次のように定義づけた。「近代的なものでも18世紀的なものでも無い。それは曖昧に定義づけられる、区別することのできない移行期、もしくはある種のニュアンスを表現している。」³³ ファゲのリベラルな心性の定義はわかりにくい、それをスタールの党派精神の説明と比較するとわかりやすい。³⁴

スタールは『個人と国家の幸福に対する情熱の影響』(*De l'influence des passions sur le bonheur des individus et des nations*, 1797)において、恐怖政治を宗教的狂信主義の延長とみなし、政治的罪の温床となりうる情熱の一種として党派精神について論じた。³⁵ スタールによれば党派精神とは宗教と政治に関わる特殊な情熱でそのあり方は時代や国によって異なる。³⁶ 党派精神について真に理解するためには政治、宗教革命を経験する必要がある、とも書いている。³⁷ スタールはフランス革命期の

右派、左派がともに、宗教、政治に由来するイデオロギー的要因に情熱的に突き動かされた結果、これらの両グループがお互いに盲目的に反発しあい、社会、政治対立を促した結果、党派精神こそフランス革命を宗教戦争に匹敵する狂信的な内容に仕立て上げた心理的要因であると指摘した。³⁸

そしてスタールによれば、この党派精神と対照的な存在が左派、右派のイデオロギーの特徴を絶対視せず、両者の接点を探って対立の終焉を目指す寛容な精神だった。それは党派精神という特殊な情熱とは対照的に、道徳的感情に裏付けられた理性と感情のあいまったもので市民が倫理的判断を下す際には社会的規範とは別の心の声を指す。スタールはこれをルソーのサヴォワの叙任司祭の信仰告白になぞってサンチマン (sentiment) と呼んだ。³⁹ ファゲの定義づけたリベラルな心性とはこのサンチマンを歴史的に定義づけた感が強い。⁴⁰

一方ファゲはスタールによるフランス革命期の右派と左派の両方が近世の宗教戦争に匹敵するような党派精神に突き動かされているという議論の中からキリスト教を根こそぎ否定した左派の党派精神批判のみを抜き出した。スタールは絶対王政と結びついたカトリック教復活を望んだ反革命派にも革命派に比類する党派精神を見出した。しかしそれから100年以上も経って、カトリック教と自由は一致するとみなす中道右派に属し自身もカトリック教徒であったファゲにとっては、スタールのカトリック教批判は時代錯誤と映った。

「フランス革命は暴力、傲慢、節度の欠落、普遍性への志向、狂信などによって特徴付けられたが、その背後には宗教戦争の時代から続くフランス人の性格が影響していた。」⁴¹

スタールはフランス啓蒙主義に内在した唯物論的傾向が近代人に対して倫理的に良からぬ影響を及ぼすだろうと考え、フランス革命派の大半の考えに反して哲学と宗教を両立させる必要性を訴え

「理想主義的哲学」という新たな概念を提示した。⁴² したがって「フランス人の性格が影響していた」と書いた時ファゲはスタールのフランス啓蒙主義批判を念頭に置いていた。そしてファゲはフランス人の性格について、次のように描写した。「1700

年以後の宗教心の弱体化によって18世紀のフランス人の性格は過度に世俗化された結果、自己の抑制に対するたがが外れてフランス革命期のブルジョワや庶民の苛立ちにつながってしまった。」⁴³

ファゲがスタールによるリベラルな心性と党派精神に関する議論をわざわざ取り上げた理由は、それが1890年代のフランスにおいても十分に意味のあるものであると判断したためだ。政教分離を法制化するに当たって、ファゲは信仰の自由の視点からカトリック教徒を擁護し、教権派と反教権派の対立を党派精神の対立として退ける一方で、スタールが強調したキリスト教的感情に裏打ちされたサンチマンもしくはリベラルな心性による右派と左派の歩み寄りおよび政治的中道路線に賛同した。なるほど教皇レオ13世は信徒に対して共和主義を受け入れるよう説くとともに、共和主義者たちも「新精神」という名の寛容の精神でもってカトリック教を受け入れつつあった。⁴⁴ つまりファゲは「新精神」の歴史的起源としてスタールのあくまで宗教的感情に裏づけられたリベラルな心性に行き着いた。

ファゲがスタールについてのエッセーを出版してから3年後に、A・ソレルは『スタール夫人』(Mme de Staël, 1890)という知的評伝を出版した。第二帝政の末期、ソレルはギゾーを通じて外務省に入局した。1872年にパリ政治学院が設立されると、ソレルもその創設に加わり教鞭を執った。その後ソレルは公務員として働きつつ歴史研究を続けた。『スタール夫人』の中で、ソレルはリベラルの視点からスタールの個人としての生い立ちや生き様を紹介するとともに、彼女の文学、評論、政治的な立場とそれらの影響について、スタールの生きた時代の分脈も取り上げつつ分析した。その結果、ソレルは20世紀のスタールの政治思想史研究の先鞭をつけた。

ソレルのスタール論はファゲと比べるとより政治的な傾向を強め、彼は何よりもスタールが「自由を愛した女流作家」だったと強調した。⁴⁵ ソレルにとってスタールが求めた「自由」とは以下のものだった。フランス革命の時代には「市民的自由と政治的自由」の実現、およびそれらを達成するための「社会と国家の改革」が問題となった。⁴⁶ フランス人の大半は「領主権の廃止、個人の自由、財産の自由、平等」を求めたが、彼らはこれ

らの権利を憲法によって保証するところまでは意識が至らなかった。

フランス人の大半とは対照的に、スタールは「市民的自由」と「社会の改革」のみを求めた。⁴⁷ ソレルはスタールが憲法によって保障されなければならない対象以上に保障のあり方自体に関心を寄せたこと、とりわけ市民権を守るための憲法を重視したと指摘した。⁴⁸ しかしソレルはそもそもスタールを含めた自由主義者たちの考え方がフランス社会の一部のエリートのみのもので、彼らがそうした考えをフランス国民全体に押し付けたことが大きな間違いだった、と判断した。⁴⁹ それに加えて、ソレルはスタールの作品には「政府が見当たらない」「自由しかない」と批判している。以上のことから、ファゲと同様に、ソレルも個人の自由を強く追求したスタールの「主体のリベラリズム」を拒絶し、暗にギゾーの「国家のリベラリズム」を称賛していることが理解される。⁵⁰

ソレルが政治的にはギゾー寄りであることは、彼がスタールの自由主義的フランス革命史の解釈を批判していること点からも確認できる。ソレルはスタールの分析的な歴史のアプローチについて賞賛する一方、「スタールが原則に間違った事実を付随させている」とお決まりの19世紀の共和主義者の批判を繰り返している。⁵¹ ソレルによれば、そもそもスタールに不足しているのは「事実ではなく、メンター」だった。ソレルはギゾーの歴史書が『フランス革命についての考察』よりも先に出版されていれば「スタールは正しい道に導かれたはずで」、「単に茂みの中で迷ってしまう状態に陥ることはなかっただろう」と書いた。⁵²

このようにソレルはスタールの政治思想に対しては必ずしも肯定的ではなかったが、彼女が王政復古の時代のフランスに及ぼした政治的影響については高く評価した。その理由はスタールがパリでサロンを再開させたからではなく、彼女が友人、家族を通じて政治的影響力を持つことができたためである。⁵³ ソレルは、スタールが左派、右派、中道派に親しい友人を持ち、とりわけ義理の息子のプロイ公を通じて教条主義者と呼ばれる人々と近くなったと書いた。⁵⁴

その結果、ソレルによれば、穏健で、自由主義的な政治が繰り返された王政復古の最初の5年間こそ『革命についての考察』の中に織り込まれたスタールの「政治スピリット」(esprit politique)

が「息吹を与えた時代となった。」⁵⁵ その結果『フランス革命についての考察』を介して、ギゾーらがスタールの「政治スピリット」を積極的に継承した」と書いた。⁵⁶ ソレルは、7月革命によってギゾーとその仲間たちが政権を奪取すると、スタールは7月王政に対しても政治的影響を及ぼし、それは1832年にギゾーとプロイ公らの内閣が成立した時点でピークに達した。⁵⁷ ソレルはこの時点で「スタールの政治的影響が終焉した」と締めくくった。⁵⁸

ソレルが意味するスタールの「政治スピリット」とは、ファゲが描写したスタールによって始まり、その後コペグループ、教条主義者を通じて19世紀のフランス自由主義者たちに伝播していった「リベラルな心性」と同質な心の在り方だった。ファゲがその宗教的側面を重視したのと対照的に、ソレルはその政治的側面を強調した。しかしながら両者は異なるなるものを排除せずに受け入れ、それらを中庸の精神の中に取り込む寛容な心の持ち方を評価しているという点で共通していた。それは、政治的、宗教的な対立を中道勢力として中和させる効果もあるという点においてリベラルな立場を意味した。ソレルによれば、スタールが及ぼしたリベラルな政治的影響というのは具体的な政治プログラムではなく、多種多様な「中道的な」政治的立場と両立しうる、キリスト教的徳に裏付けられたある種の世界観や気質のようなものを指した。ソレルの『スタール』は人気を博し、1890年、1893年、1901年、1907年に再版された。ソレルの著作によって自由主義に親和性を持つ知識人たちはスタールに対する関心をさらに強めていった。

ここまでドレフェス事件以前の世紀転換期に発表された2人の代表的なオルレアニストの評論家によるスタール論を分析した。ファゲとソレルのスタール論にはいくつかの共通点があった。両者はスタールの立憲主義について踏み込まず、リベラリズムの政治思想家としては「国家のリベラリズム」を重んじたギゾーが偉大であることを認めた。しかし彼らは、リベラルな心性、政治スピリットなどの言葉によってスタールの政治思想における宗教的感情によって裏付けられた中庸の精神を高く評価した。とりわけファゲは、ドレフェス事件の前夜にスタールの「リベラルな心性」と政教分離の問題を関連づけることによって、トクヴ

イル、キネらによって伝搬されたスタールの精神的遺産を20世紀に繋げた。⁵⁹

2. チボーデによるスタール論と「教条主義の母」「フランス自由主義の母」

ファゲとソレルは19世紀半ばに生を受けた。彼らが成長する過程においてスタールやギゾーらについて直接知っている人たちの話を聞いたこともあつたろう。一方A・チボーデ(1874-1936)は先の2人から三十数年後に誕生したため彼にとってスタールとは歴史上の人物以外の何物でもなかった。その結果、チボーデはドレフェス事件前夜ではなく1930年代のヨーロッパ大陸でファシズムの嵐が吹き抜ける最中にスタール論を発表した。チボーデはフランス人だったが、ジェネーヴ大学の教授として長くジェネーヴに住んだ。そのためチボーデは世代の違いに加えて、「フランスの中のアウトサイダー」としてジェネーヴと言うヨーロッパ精神を体現するコスモポリタンなプリズムを通じてスタールの政治思想を解釈した点でも、先の2人とは異なった。

チボーデは1932年に『フランスの政治思想』(*Les idées politiques de la France*)を発表した。⁶⁰ それから2年後にチボーデは「自由主義という言葉は過去の産物となった」と書いた。⁶¹ さらにそれから2年後の1936年に19世紀フランス自由主義者の政治思想を掘り起こすべく『1789年から現在までのフランス文学について』(*L'Histoire de la littérature française depuis 1789 jusqu'à nos jours*)を出版した。⁶² 『1789年から現在までのフランス文学について』の中でチボーデはファゲやソレルの評論の影響も受け入れつつ、スタールが何、誰から影響を受け、何、誰に影響を与えたかを主軸としたスタール論を展開した。⁶³

1932年にチボーデが『フランスの政治思想』を出版したのは彼がヨーロッパ大陸を襲った「ファシズムの波」を警戒したためリベラリズムを再定義する必要に駆られたためだった。チボーデは、ヨーロッパ大陸の多くの国で「政党、世論、議会」などの政治的リベラリズムの諸制度が失われる一方で、フランスは、唯一イギリス、オランダ、ベルギーとともに議会民主主義を維持し得たと書いた。チボーデはその理由としてこれらの4つの国が植民地を持ってからだとして、リベラリズムの

脆弱さについて強調するとともに、新たな政治状況に見合ったリベラリズムの再生が必要であることを示唆した。⁶⁴

以上の文脈において、チボーデは『フランスの政治思想』においてフランスにおけるリベラリズムの現状について宗教、政治、経済の3つの視点から見直した。⁶⁵ チボーデは宗教的リベラリズムについては政教分離法によってすでに実現したこと、そしてこの政教分離の原則について、フランスではリベロー以外誰も望まなかった原則であり、リベローの勝利だったことを強調した。⁶⁶ チボーデは政治的リベラリズムについても、(19世紀フランスとは異なり)第三共和政期のフランスはすでにこの問題を解決済みであると書いた。「中央集権国家、王政以来のフランス固有の行政国家の視点から見ればフランスはリベラルとは言えないが、議会共和政が自由な政治制度を樹立した結果、これらの二つの傾向は両立するに至った。自由な市民は国家権力に反発するための政治諸制度を持っているという点で、現在のフランスは政治リベラリズムにおいても満足な状況である」とし暗にギゾーに由来する「国家のリベラリズム」を賞賛した。⁶⁷

チボーデは3つ目の経済的リベラリズムについてのみ、「国外的には保守主義、国内的には社会主義によって、経済リベラリズムは抹消されたが、これは今後考えていかななくてはならない分野である」と書いた。⁶⁸

チボーデは宗教的、政治的条件が整ってもリベラリズムが安定しない1930年代のフランスの状況を改善させるにあたって、効率的な経済政策に加えて社会心理的要因に注目した。つまりチボーデもオルレアニストの流れを汲んで立憲主義による個人の倫理的独立性を確立させるのではなく、リベラリズムの本質がリベラルな心性である点を強調した。「ある一つの考えのみが宗派、党派とならず、また本質的に宗派、党派の状態と対立する、それがリベラリズムである。したがってこの意味におけるリベラリズムを排除する政治思想が政権についた時、リベラリズムは弾圧される。それがファシズムと共産主義だ。恐怖政治、第二帝政の初期の時代以来フランスはリベラリズムが完全に排斥されるような状態になったことはない。しかし今日全ての国がこうした危機的状況に瀕している。」⁶⁹

先に述べたとおり、党派精神と対立するリベラルな心性について最初に書いたのはスタールだった。ファゲやソレルはドレフェス事件の前夜に「リベラルな心性」としてこれを復活させた。そしてチボーデはそれを1930年代の政治状況に適合させて改めて取り上げた。そして1932年にチボーデは寛容、中庸の精神に貫かれたリベラリズムを党派精神に突き動かされたファシズムや共産主義と対比させた。つまり、チボーデの目指したリベラリズムとは、特定の政治イデオロギーに左右されない、リベラルな心性に根ざしたリベラリズムだった。

以上に述べたオルレアニストに特有なリベラリズムの社会心理的要因に加えて、チボーデは新しい時代に求められるリベラリズムとは歴史の流れに逆らわないしなやかなリベラリズムである点を強調する。彼は1830年から1930年までの100年間に歴史のサイクルが一巡し、1930年代のフランスは1830年の地点からの再出発である、と考えた。⁷⁰ つまりチボーデにとって1930年代のフランスにとって最も意味のある政治的リベラリズムとはあくまでも7月王政のブルジョワリベラリズム、つまり「国家のリベラリズム」であり、この時代に活躍したギゾー、プロイ公らの教条主義者たちが1930年代の中道右派の知識人にとってのお手本であることには変わらなかった。

同時に、チボーデはフランス政治が右派と左派、もしくはファシズムと共産主義といった二極化が進行する1930年代前半に、中道の政治勢力としての、そしてギゾーの「国家のリベラリズム」とは異なる、彼がドクトリンと呼んだオルレアニスト・リベラリズムを再生させた。

それは第一に中庸の精神を重視し、第二にフランスに特有のリベラリズムとは進化する歴史状況に溶け込むしなやかさをもったもの、そして第三に国粋主義(ナショナリズム)と結びついた野党的立場のもの、と要約できよう。⁷¹ このうち最初の二つの要件はスタールが提案し教条主義者が受け入れた19世紀以来の教条主義者たちのリベラリズムに由来した。⁷² しかし三つ目の要件はチボーデが1930年代の時代に合わせて新たに付け加えたものである。ここではチボーデの定義づけた3つの要件によるリベラリズムをギゾーに由来する「国家のリベラリズム」と区別するために「教条主義的オルレアニズム」と呼ぶ。

チボーデが『フランスの政治思想』において新たなリベリズムを規定してから4年後の1936年に、フランスではファシズムへの恐れから「人民戦線」が成立した。そしてフランス政治においてはさらに政治の右派左派の二極化傾向が進行した。こうした歴史状況の中でチボーデは『1789年から現在までのフランス文学について』の中で新たにスター論を取り上げた。チボーデはスタールに対して突極の敬意を払わなかったわけではない。彼は「18世紀の上流階級の女性がエスプリによって君臨したのなら、スタールは天賦の才能によって自分の時代に君臨した」と書いている。しかし同時に「スタールはサロンのナポレオンである」とも書いてスタールが女性でありながら男性的役割を担ったことを揶揄している。⁷³この一例が示す通り、チボーデのスタール評論には賞賛と批判、光と陰が分かちがたく結びついている。加えたそこには見下した表現が目立った。

「女嫌い」の傾向はチボーデのスタールの作家としての資質についての描写に最も強く表現されていた。「スタールほど他人の考えから影響を受けた作家はいない。」⁷⁴彼女の文体は「重たく」「表面的で」、「ほとんど自分では本を読んでおらず、他人の本の内容について書いているが、それは他人の人から聞き知った内容である。」⁷⁵「スタールが書いた内容は時事的情報に過ぎず、時代を超えて影響を持つことはなかった。」⁷⁶「スタールはドイツ語が読めなかったのにドイツについて書いた。それが可能だったのは、コペのサロンで聞き知った考えを繰り返したからである。」⁷⁷これまでの引用から、チボーデがスタールには創造性というものがなく、彼女は会話を通じて得た表面的な事実情報を彼女のボディエーの中で総合しそれらを次の時代に伝搬した作家、となろう。この定義はファゲのものに近い。⁷⁸

チボーデは同じ視点からスタールとコンスタン作家としての関係性についても論じている。「コンスタンが当然スタールからインスピレーションを受けた」ことは認めるが⁷⁹、後世への影響となると「私たちはスタールについては知り尽くしてしましたが、コンスタンについては知り尽くしたとは言えない。」私は「彼の有名な女友達よりも、コンスタンに対してより高い評価を与えたい」などと書いている。⁸⁰

このようにチボーデのスタールの文学についての評論は惨憺たるものだったが、それとは対照的に彼はスタールの政治評論については相対的に好意的な評価を下している。その理由の一つが先に触れたジェネーヴだった。チボーデがスタールについて政治的に語る時、彼女の文化的出身地でありチボーデも長く住んだジェネーヴを抜きにして語ることはできない。「(ジェネーヴを含む)フランス語圏のスイスとサボワ地方は偉大な文学の発祥地である。地方と外国の文化で、パリの影響から部分的に逃れることができた。この地域は貴族的であっても議会的ではない。・・・そしてパリ、アカデミー、百科全書派、分析的な言語などの18世紀末の要素から一時的に逃れることができた。」⁸¹またチボーデはジェネーヴ人の特質として「プロテスタント的精神性、秩序立った家庭生活、情熱的で鷹揚な性格、光り輝く徳」などを好意的に評価している。⁸²

チボーデはパリには常にパリ派とジェネーヴ派のグループがあり、この二つのグループが対立、共存してフランスの政治制度は民主化していったと解釈した。それは18世紀の啓蒙主義の時代にすでにヴォルテールとルソーの対立に象徴された。恐怖政治以後の1795年から1800年にかけて、フランスにはフランス的考え方を受け継いだイデオログたちのサロンとジェネーヴ的世界主義を標榜したスタールのサロンが共存していた。チボーデによればこの二つの伝統は1800年に融合され、フランスは大きな国の共和国という新たな政治的試みを進化発展させて行くはずだった。スタールの『文学について』にはそうした希望が込められていたが、この作品の出版直後にこの希望はナポレオンによって打ち砕かれた。その後ナポレオンはスタールを国外追放し、ジェネーヴ的要素はナポレオン帝国から消滅した。⁸³

しかしながらチボーデはスタールの『フランス革命についての考察』の出版によって、王政復古フランスに再度ジェネーヴ的要素が復活した、と解釈した。世論を凄然とさせた作品こそ「政治マニフェスト」、「彼女の政治人生の遺言であり、スタールの最も重要な作品の一つ」であるとして高く評価した。⁸⁴

そしてソレル同様に、チボーデもスタールが「自分の家族やコペの仲間を通じてフランス政治史に影響を及ぼした」と書いた。⁸⁵しかしながらその

影響とは、スタールの「政治思想によるものではなく、巨大な対話を可能としたコーラス部隊の指揮者、および名家の女主人として」だった。⁸⁶ この文脈でチボーデはスタールを「教条主義の母」「ブロイ公の義理の母」と呼んだ。⁸⁷ 「母」「義理の母」と並べて書くことによって「教条主義の母」という表現自体を茶化しているようにも読める。「義理の母」という表現にはとかくネガティブな印象が伴うが、スタールをそのように呼ぶことによってチボーデは政治の引導を確実に義理の息子のブロイ公に渡した。

その結果、チボーデはスタールの「政治マニフェスト」が10年後に教条主義者の「ドクトリン」、つまり教条主義となったとした。⁸⁸ チボーデにとって教条主義とは「フランス王政的リベラリズム、ジュネーヴの政治的、知的伝統、イギリスの憲法モデルの3つの要素が融合した政治モデル」だった。⁸⁹ この時点でスタールの「政治マニフェスト」がそのまま教条主義となったのか、それが教条主義者の手を借りたものだったかがあいまいになっている。

ソレルと同様に、チボーデも1830年の7月王政が成立して教条主義者が政府のメンバーとなり、教条主義がフランスの国政に取り入れられたことを認めた。⁹⁰ そしてチボーデにとっては、この19世紀の教条主義の再生版である教条主義的オルレアニズムこそ1930年代のフランスに必要とされたリベラリズムだったことはすでに指摘した。ちなみにチボーデは1930年代のフランス政治における寛容の精神を体現したジュネーヴの影響の一例としてA・ブリアンを挙げたが、ブリアンはスタールの考えに通じる自由主義的な政教分離法の成立に貢献した政治家としても知られていた。⁹¹

ここまでのチボーデによるスタール論を要約すると、チボーデは教条主義者およびコンスタンという二方向からスタールをフランス自由主義の系譜に位置付けたことが明らかになった。チボーデは「スタールとコンスタンが政治的自由主義の父と母である、もしくは思想においてジェンダーの意味合いは薄いので、2人はともに自由主義の創造者である」と書き、スタールとコンスタンにはフランス自由主義の草分けとして政治思想上のつながりがあったことも認めた。⁹²

同時にチボーデはスタールを「教条主義の母」とも呼んだ。「教条主義の母」とは何よりも王政復

古の時代にスタールの娘がブロイ公夫人となり、スタールとブロイ家が家族関係となったことに由来した。つまり「教条主義の母」という表現にはスタールが具体的な政治プログラム、政治思想の痕跡によって教条主義者や1930年のフランスになんらかの実質的影響を与えたことを認めたわけではなかった。その結果チボーデはスタールの後世への影響について次のように結論づけた。「スタールが後世に影響を与えたのは彼女の遺族によるものだった。つまり、政治、文学上フランスに多大な影響を与えた地方名望家の由緒ある家族であり、19世紀のフランス史と深く結びついたブロイ家を通じてだった。」⁹³

このチボーデの見方は正しい。スタールの孫のアルベール・ド・ブロイ公は貴族、リベラル、オルレアニスト、カトリックとして第二帝政期にはナポレオン三世と当時のフランスのカトリック教会の強硬な傾向に抵抗し続けた。その結果第三共和政が成立すると、アルベールは大統領が告知によって議会に対して自らの政治行動を通達する義務がある、という1873年3月13日の法律を樹立させた影の立役者となった。⁹⁴ またアルベールは、王党派と共和派の間に入って、強い大統領の権限、および保守的な二院制を認めさせた。このように第三共和政の初期にブロイ家は第三共和政の憲法に王政を想起させるような中道主義的要素を盛り込むことに貢献した。

しかしながらそれから半世紀が経過した1930年代のフランスにおいては経済危機の深刻化とともにヨーロッパ全域でファシズムの波が拡大するとともにその対抗勢力としての共産主義勢力も拡大した。その結果政治の二極化現象が政治状況をさらに不安定化させる中、チボーデは7月王政からちょうど100年後の1930年代のフランスに教条主義的オルレアニズムを再生させた。

チボーデが認識した教条主義的オルレアニズムの趣旨はジョームが教条主義者によるリベラリズムとして分析し、ファゲやソレルらに支持された「国家のリベラリズム」とは趣を異にするリベラリズムだった。なぜならギゾーが「中庸の精神」(l'esprit du juste milieu)の実体を求めて中産階級を模索したのとは対照的にチボーデの教条主義的オルレアニズムは右派左派に対する相対性こそを強調したからである。相対性とは党派精神に突き動かされた右派と左派が究極的に二極分化し相互

対立して政治的均衡を欠いていく状況の中、中道勢力が寛容の政治勢力として両者の均衡を図ることを意味する。それゆえ共和主義か王政かを二者択一とせず時代の流れに沿ってしなやかに変貌するリベラリズムでもあった。

最後に教条主義的オルレアニズムとギゾーの「国家のリベラリズム」がもっとも異なる点は前者が野党をそして後者が政権政党を特徴づけた政治イデオロギーである点だった。キリスト教に由来する宗教感情をベースとするという意味では教条主義的オルレアニズムは右派および王党派のそれであるにもかかわらず共和主義にも適合したという意味ではそれは自己犠牲に立ったリベラリズムでもあった。

チボーデはスタールや教条主義者から学んだこのリベラルな心的態度を重んじるリベラリズムを復活させることによって戦間期の政治危機を乗り越えようとした。野党的立場でありつつ、寛容の精神によってファシズムと共産主義を共に押しつけ、特定のイデオロギーに左右されずに自由と秩序を最優先する中道路線を目指した。それは社会的には、知的エリート集団としてあらゆる政治的権力に対して一定の距離と批判的な眼差しを保ち続ける政治的マインドを持ったリベローを結集させることを意味した。

最後に、チボーデがスタールを「教条主義の母」「ブロイ公の義母」と呼ぶ一方で、彼女の思想家としての役割を軽視したことを指摘したが、それは彼が単に「女嫌い」だったからだけではなかったことも書き加えておく。第三共和政時代のオルレアニストがおしなべてスタールの政治思想に触れない理由として、スタールが民主主義を拒絶した点が彼らには時代錯誤的に映ったとも考えられる。⁹⁵

それに加えて、思想家としてのスタールが軽視された理由として、オルレアニズムの中核にある中庸の精神には公的側面と私的側面の両方があったことも影響した。政治アクターとしてのリベロー(中道派)の中庸の精神について論じる際、そこには政治的中道主義などの公的意味合いももちろん含まれた。しかしスタールが『文学について』などに書いたとおり、中庸の精神とはもともと道徳的意識の高い私生活、とりわけ精神性の高い女性の影響のもとで醸成される感情だった。⁹⁶ 中庸の精神の公私にわたる両義性故に、戦間期の男性研

究者はスタールを論じるにあたって、とかく中庸の精神の私的側面のみを取り上げたとも考えられる。

この解釈の一例としてスタールの義理の息子であるブロイ公の例を挙げて具体的に説明したい。ブロイ公はもともと反革命派で旧体制ではルイ14世の大臣を務めたブロイ元帥の孫だった。しかしながらブロイ公を育てた義理の父のアルジャンソン伯爵はフランス革命に全面的に賛同した開明派の貴族で、この義理の父の影響下、ブロイ公も無神論や唯物主義などの考え方に強く傾倒していった。その結果王政復古当初ブロイ公にとってコンスタンやラファイエットらがもっとも信頼しうる政治的盟友だった。このようなブロイ公を宗教心に目覚めさせ、教条主義者に変貌させたのがブロイ公の「義理の母」スタールだったのである。

この点についてレミュザは次のような証言を残している。

「ブロイ公はそれまで読んだ書物の影響のもと、教条主義とは相矛盾する合理主義的な無神論や功利主義を信じていた……。ところがスタール夫人と家族関係になるやいなや、ブロイ公は彼女が年をとって成熟したことを感じとった。ゆるやかなプロテスタント信仰、ドイツの哲学的省察やイギリスの道義的態度への信奉へのイニシエーションを通じてスタール夫人はブロイ公が一人ではとうてい到達しえない高みへと、義理の息子の思想と感情のレベルを引き上げることに成功した。」⁹⁷

スタールは「リベラルな心性はリベラルな政治制度にこそ宿る」と主張してリベラルな政治制度を確立しさえすれば、その制度に身を置いた政治家たちはその党派精神を徐々に緩和させることができる、と考えていた。⁹⁸ しかしこうした考え方は1930年代にはもはや現実的ではなかった。1930年代のフランスにはすでに自由な政治制度が備わっていたにもかかわらず、経済的困難によってフランスの政治文化に深く根付く党派精神が復活し自由と秩序を危機的状況に陥れたからである。その結果、チボーデは政治制度以外の要素によっ

でもたらされる「政体や党派の違いを超えた中庸の精神」が1930年代の中道右派に求められた精神であることを見て取った。それはチボーデがモンテスキューによる政治制度を支える重要な要因であるところの社会風習の重要性を改めて認識した瞬間だった。

チボーデはスタールの党派精神と中庸の精神の議論を教条主義的オルレアニズムの中心に添えた。つまりチボーデは教条主義的リベラリズムを規定する上でスタールの思想を1930年代の時代に復活させた。そうでありながらチボーデはスタールを教条主義の「母」と呼ぶことによって、そしてスタールが著作で説いた理想主義的哲学における宗教心や中庸の精神ではなく、彼女とブロイ公の家族関係を強調することによって、1930年代に復活した教条主義的オルレアニズムにおけるスタールの政治思想的影響については目隠しをしてしまったことは間違いない。

3. 第二次世界大戦後：「教条主義の母」「フランス自由主義の母」「女嫌い」

第二次世界大戦後のフランスの知的シーンはマルクス主義の強い影響を受けた。その結果1945年から30年の間フランス自由主義研究は主に英米で進展していった。この状況に変化が訪れたのは1970年以後のことだった。それ以来過去50年ほどの間にフランスは大きく変化し、政治思想家としてのスタールをめぐる状況もめまぐるしく好転していった。

それには大きく分けて二つの理由があった。第一に、戦後フランスにおいて女性と政治、哲学との関係が著しく変化した。その結果、女性であるがために投票権や代議士に選ばれる権利を持っていなかったとしても、サロンやペンによって時の政治に影響を与えようとしたスタールが歴史研究の対象とみなされるようになった。第二に、1970年代以後フランスでもマルクス主義の知的、政治的ヘゲモニーが衰退した結果、政治的自由主義が次第に復活し、スタールの文学および政治思想に対する学術的関心が高まった。

第二次世界大戦後に初めてスタールの政治、思想活動について書いたのは、フランス自由主義研究の代表的研究者であるA・ジャルダンだった。彼は『フランスにおける自由主義の歴史』(*Histoire*

du libéralisme en France, 1985)の中に「スタールの立場」(*La place de Mme de Staël*)という章を加えた。⁹⁹これは戦後スタールの政治活動、政治思想について歴史学者が著した最初の論文となったが、この中でジャルダンはチボーデによる「教条主義の母」という表現を肯定的に取り上げてスタールと教条主義者の関係について説明した。¹⁰⁰同時にジャルダンは「作品を通してみたスタールの思想の動きについて書いたが、その中には理論的な内容の作品は一つもなかった」と書き、戦前の3人の評論家と同様にスタールにはオーソドックスな意味での政治思想が備わっていなかった、と繰り返した。¹⁰¹

1980年代からポスト冷戦期にかけては、世界的にフランス自由主義思想に対する関心が高まっていった時期である。しかしながら少なくともフランス国内においては、スタールの政治思想史における立場が必ずしも好転したわけではなかった。スタールの『フランス革命についての考察』の序論を書いたJ・ゴデショは「スタールがシャトブリアンとともにフランス革命期の代表的な作家であることに異論はないだろうが、人は彼女についてほとんど知らない。なぜならスタールは『作家と政治的役割』を同時に演じようとしたからだ」と書いた。¹⁰²歴史家のM・ドロンも「スタールのイメージは両極端で、肉体がフランス革命の理論家と一致していない」と書いている。¹⁰³これらのコメントは、スタールの政治的立場とは思想（「フランス自由主義の母」と肉体（「教条主義の母」）の間をさまよいつづけているという意味において、戦前のクリシェを繰り返しているにすぎない。

硬直した状況に変化が訪れたのはジョームが『消された個人』(*L'individu effacé, ou le paradoxe du libéralisme français*, 1997)においてスタールを政治思想家として取り上げたためだった。ジョームは政治的視点から19世紀のフランス自由主義を、主体のリベラリズム、国家のリベラリズム、カトリックのリベラリズムの3つのモデルに分類した。ジョームによれば、19世紀フランスにおいて最も政治的影響が強かったのが、ギゾー、純利派、オルレアニストらに代表される「国家のリベラリズム」だった。¹⁰⁴彼らは国家の社会的、政治的影響力に基づいて社会を再編し、中産階級を主体とした「エリート主義的な自由主義、ないし名望家主体の自由主義」を形成した。これはガバナンスの

視点からアプローチする、個人の国家に対する服従を前提とした「奇妙な」リベラリズムであり、ジョームによればこれは英米のリベラリズムと逆行する反個人主義的なリベラリズムだった。ジョームはモンタランベールなどの自由主義的カトリシズムにおいても国家による個人の保護に重心が置かれていた点を強調している。¹⁰⁵

ジョームによれば、これらの2つの自由主義の潮流と趣を異にするのが、スタール、コンスタン、トクヴィル、L-A・プレヴォ-パドルに代表される「主体のリベラリズム」だった。¹⁰⁶ プロテスタント系の思想家を多く携えたこの政治潮流こそ、英米のリベラリズムの伝統に最も近く、国家権力に対して個人の市民的権利をどのような立憲制度の元で防衛するかという問題を第一義としたリベラリズムであり、ファゲの言葉を使えば国家の影響から倫理的に「独立した個人」を主体としたリベラリズムだった。しかしジョームは、このリベラリズムは中央集権化された肥大な行政国家が中心的な役割を演じるフランスの政治文化にあっては少数派だったと指摘した。最後にジョームは主体のリベラリズムと英米の自由主義の違いについても触れ、主体のリベラリズムにおいてはカントの哲学の影響の元で個人の倫理的基盤として、理想主義的哲学に由来する個人の自由裁量が重んじられた点を指摘した。¹⁰⁷

ジョームはチボーデの「スタール=教条主義の母」という表現を取り上げたが、それはチボーデの説を否定するためだった。ジョームは「政治思想的に考えると」スタールは教条主義者たちとはかなり隔たっていることを強調する。その結果、ジョームはチボーデが論じた「スタール=フランス自由主義の母」説を支持し、スタールとコンスタンの政治思想上のつながりを強調した。¹⁰⁸

ジョームのフランス自由主義研究は今日までその影響を保ち続けている。例えば日本では安藤隆穂氏が『フランス自由主義の成立：公共圏の思想史』においてジョームと同じ立場からスタールを教条主義者や国家のリベラリズムと対立させている。¹⁰⁹ 同様に工藤氏のスタールの政治思想解釈もジョームの解釈を基軸として展開させている。¹¹⁰

ジョームは積極的に倫理哲学の視点からスタールのフランス自由主義への思想的貢献を取り上げることによってスタール研究の活性化に貢献をした。そうでありながら『フランス革命についての

考察』に関してはこの遺作が「未完成だった」ため、この本に包含されたスタールの政治思想的內容については吟味しないと断った。この著作には共和主義の時代に書かれた『現状について』とは異なる内容のより歴史的な脈を加味した政治思想が記されていたがそれについては蓋をした。そしてジョームはスタールとコンスタンの思想の違いについては触れることなく、彼女が主体のリベラリズムの政治理論構築に貢献できなかったとして、代わりに彼女の死後コンスタンがその役割を担ったとした。¹¹¹ ジョームはスタールを「フランス自由主義の母」と呼ぶ一方で彼女の晩年の政治思想については見過ごした、という点でチボーデらの「女嫌い」の態度と変わらなかった。

ここまで過去100年間のスタールの世論における受容の分析を通じて、チボーデによる「スタール=教条主義の母」、「スタール=フランス自由主義の母」の意味内容を政治思想史の文脈に沿って明らかにした。チボーデはスタールを政治思想家としては「フランス自由主義の母」と規定するとともに、家族、社会関係の政治的影響が重んじられる際にスタールを「教条主義の母」と呼んだ。そしてチボーデは19世紀のフランス自由主義の系譜においては後者の影響が優ったと結論づけた。

一方20世紀末にジョームはチボーデと対照的なスタール論を展開した。フランスではマルクス主義が後退しそれに変わる思想として「人権」が注目されていた。こうした世相はジョームのフランス自由主義研究にも反映され、ジョームはスタールがコンスタンとともに人権を尊重した主体のリベラリズムに貢献した政治思想家であると考え、チボーデによるスタール=「フランス自由主義の母」を復活させた。同時にジョームも「スタールの政治思想については踏み込まない」というチボーデらの傾向を引き継いだ。以上のことから第二次世界大戦前、後のスタールの政治思想研究を一貫して特徴付けた「教条主義の母」、「フランス自由主義の母」などの表現には、政治思想上の実体がない事が明らかになった。

第二次世界大戦を挟んだ研究者のスタールの政治思想に対する見方は対象的だった。同時に世代の異なるこれらの研究者たちには、スタールの立憲主義思想については全く取り上げない、という共通した特徴も持っていた。戦間期から戦後にかけてスタールが「教条主義の母」「フランス自由

主義の母」と呼ばれた政治思想史的背景について分析してきたが、そこには「女嫌い」の感情が大きく作用したことが明らかになった。

フランスにおける政治思想史の創始者として知られるチボーデがスタールについて論じる際に有力政治家であるブロイ公との家族関係を主体に論じた時、そしてジョームがスタールを「フランス自由主義の母」と呼びつつ彼女の晩年の政治思想を見過ごして主体のリベラリズムを政治思想的に確立したのがコンスタンだったと主張した時、彼らはスタールという歴史上の女傑を基本的には男性のみで構成されるべき政治思想史に迎え入れることを拒否したと言えよう。その結果一政治思想家としてのスタールは「母」としてフランス自由主義研究の辺境に置かれることとなった。

4. E・エリオとジェンダーフリーなスタールの政治思想論

第三共和政の政治文化には反フェミニスト的傾向が強いことはよく知られている。それにもかかわらず第三共和政期には女嫌いの感情に左右されないジェンダーフリーなスタール研究が始まっていた。それは第三共和政期の著名な中道左派の政治家として活躍したE・エリオによるスタール論である。

エリオはスタールの未発表論文がフランス国立図書館で発見されたことを受け、この未発表論文を博士論文の一部として取り上げた。そしてエリオの博士論文が出版された後に、この未発表論文を『スタールの未発表の作品：政治著作の一片』

(*Un ouvrage inédit de Madame de Staël. Les fragments d'écrits politiques*) (1904)として自ら編集出版した。これは今日スタールの共和主義的自由主義政治思想の代表作として広く知られている

『革命を集結させる現在の情勢について、並びにフランスに共和国を建設すべき原理について』

(*Des circonstances actuelles qui peuvent terminer la Révolution et des principes qui doivent fonder la République en France*) (以下『現在の情勢』とする) だった。¹¹²

スタールは1795年にそれまでの立憲君主派の立場を捨て去って、穏和な共和主義政体を受け入れた。同年に総統政府が樹立されるとパリに戻り、再度政治サロンを開いて自由と秩序を両立しうる

議会制度を樹立させるための政治活動を再開した。しかし議会で王党派の勢力が高まる1798年の末、スタールやシイエスらはフランス革命を終焉させ、共和主義を持続発展させるために共和政議会の中に保守の原則を確立させる可能性について模索した。¹¹³ しかし間もなくナポレオンが権力の座に就くと、スタールは生涯この政治エッセーを出版するタイミングを逸した。ちなみに『現在の情勢』は、今日的には高名なフランス人研究者のM・ゴーシェによってスタールの政治エッセーの中で「最も鋭い分析力を持つ」として高く評価されているものである。¹¹⁴

エリオ(1872-1957)は高等師範学校に入学後、高校でフランス語を教え文学者として研究を続けた後、政治家に転向した。急進党のメンバーとして、第三共和政では上院(1912-1919)、下院議員を務めるとともに(1919-1940, 1945-1957)、第三共和政では大臣や国民議会の議長などにも指名された。また1905年から1940年まで、そして1945年から1957年までリヨン市長も務めた。要約すれば、エリオは戦間期から戦後にかけて一貫して中道左翼の中心的メンバーとして積極的に政治活動を展開した。

エリオはスタールの『現場の状況』について次のように評論している。

「一箇所か二箇所疑わしい箇所もあるが、スタールは党派精神に突き動かされておらず、まさしくそのために1798年に書かれた作品が私たちの時代にもその重要性を保っている。極めて冷静にこの作品を研究する必要がある。真実の光の中に置き換える必要がある。これを政治や宗教の党派精神の視点から読むべきではない。」¹¹⁵

このように、中道左派のエリオも中道右派のリベローと同様に、スタールの中庸の精神の擁護と党派精神の拒絶を何よりも高く評価した。

同時にオルレアニストの政治評論家と大きく異なる点として、エリオが正面からスタールの共和主義と融和しうる立憲主義を取り上げ、分析、紹介した点である。エリオは原稿が発見された状況、作品が書かれた時代、作品を書く上でのコンスタ

ンとの知的協力関係、そして作品の独自性と価値などについても論じた。

エリオはこの作品におけるスタールの独自性について、急進党のメンバーとしての視点から論じた。エリオにとってもっとも重要な点の一つは共和主義を受け入れた際スタールが表明した強いアングジュマン(政治的コミットメント)だった。

「穏健派はもはや政治グループとして存在すべきではない。(穏健派の一部は王党派に属し、他は共和主義派に属する。そして共和政府は「改宗」を迫るが、フランスでは王党派と決別しない限り共和主義者とみなされたことにはならない、という点については明言を避けている。」¹¹⁶

スタール自身は引用のごとく揺るぎない共和主義に対する自身の思いによって、自らに降りかかる政治的危険を顧みず、1795年から1800年にかけて王党派を共和主義に引き込むための活発な活動を展開した。そして急進派寄りの共和主義者として、エリオは中道主義におけるこの条件が第三共和政の穏健派にとって何よりも重要なポイントであることを指摘した。

それ故に、エリオはスタールの中庸の精神についての議論を共和主義的立憲主義と絡めて論じたのだろう。これはエリオが中道右派のオルレアニストたちと明らかに一線を画した点である。「スタールの政治システムを要約すると、それは中庸(平準化)のシステムと言える。スタールは政治的観念論を好む。それについてはしばしば批判されてきた。しかし彼女が政治的観念論を好むのは、得られた結果を証明するために数学を使って証明するのと同じことだ。」¹¹⁷エリオはスタールが抽象的な政治理論家であることを否定しつつ、『本来の観念論とは、経験がもたらした結果について、その原因を知らしめるためにある』というスタールの言葉を引用している。¹¹⁸ 政治理論や観念論に依拠したスタールの政治思想を正面から取り上げたエリオのスタール論は、歴史状況を重視しつつ中庸の精神を強調したチボーデらオルレアニストの中道右派寄りのリベラリズムとは異なる。

エリオはスタールの政治的自由主義の二つの決定的な欠点についても明言した。一つ目はスター

ルの絶対的とも言える所有権重視の立場である。これは19世紀末以来政治的影響力を持ち始めた、弱者と強者の経済格差を修正することを是とした社会主義が政治的影響力を持つ第三共和政の時代には受け入れがたい考え方だった。エリオは「スタールは共和主義を採用したからといって、自分の素晴らしい財産を守るために所有権について諦めるよう忠告する気は毛頭ない」と皮肉たっぷりに書いている。

二つ目は宗教の問題だ。エリオから見るとスタールは宗教について中立の立場を保持しているとは言えず、(プロテスタントの視点から)「カトリック教を強く嫌っている。」¹¹⁹ 第三共和政期の中道右派の論客は一般にカトリック教の信仰について自由の中心的な局面とみなしたが、同時にフランス革命期にカトリック教を反革命の党派精神の一部とみなしたスタールの考え方については(文脈が異なるものとして)沈黙を保ったことはすでに指摘した。この点でも、右派があくまでも歴史的流れの中で変化する自由の概念を重視し革命期の反革命派と第三共和政期のカトリック派のリベラルを区別したのに反して、エリオは哲学的視点からスタールの思想の時空を超えた特徴を重視している。

以上の二つの点を除いて、エリオはスタールの自由主義的共和主義思想の議論が正当なものであることを認めた。その結果エリオはスタールを政治作家(*écrivain politique*)と結論づけて「フランス革命期の最も影響力のあった思想家の1人である」と高く評価した。¹²⁰ それから20年後の1930年代末にヨーロッパにおける民主主義の未来が怪しくなっていた頃エリオは再びスタール論を取り上げたがそれは20年以上前に取り上げた共和主義的立憲主義の議論ではなくスタールの「歴史を通じて政治思想を語る」側面、つまり自由主義的フランス革命の解釈に関するものだった。

「フランス革命は一つの塊ではない。革命には優れた点と嫌悪すべき点がある。そこから将来に必要な教訓を引き出すためには、フランス革命の中に多様な要素を認識しなければならない。」¹²¹

エリオは中道派の共和主義者として、フランス革命を善悪の二つの局面に明確に分け恐怖政治を含む専制政治的な傾向を拒絶したスタールの自由主義的フランス革命史の解釈に全面的に賛同して、政治思想としてのマルクス主義に対して自由の視点から警鐘を鳴らしたのである。

このようにスタールを「母」という呼称を使わず一政治思想家として位置付けたエリオのスタール評論には「女嫌い」の傾向が見受けられない。エリオは驚くほど時代を俯瞰し、独立精神を持ってスタールを分析したと言えよう。その結果エリオは21世紀の今に続くジェンダーフリーなスタールの政治思想研究をスタートさせたパイオニアとなった。

スタールの思想は政治思想ではない、というのは現在でも繰り返し語られるクリシェである。アメリカの高名な歴史学者R・ダーントンは「スタールがイギリスの立憲君主制について語る時、それは全く凡庸な政治モデルを指している」「政治思想史の教科書にスタールの名前は見当たらないが、そうした事実は彼女が政治思想家ではないことの何よりも証明である」などと書いている。

122

研究者がスタールを正統な政治思想家とみなそうとしない頑なな態度に合理的な理由が見当たらないわけではない。チボーデが指摘した通り、スタールは先人の政治哲学者、およびフランス革命期の思想家から影響を受けた。しかし多様で相矛盾する考え方をその矛盾も含めて総合させることを優先させた結果、スタールの思考には厳格なロジックに欠ける面があることは否定できない。しかしこのロジックの弱さを政治の実践の場における回復力、柔軟性、現実的妥協と理解すればそれは実際主義的な要素を兼ね備えた政治思想となりうるのではないだろうか。

更に言えば政治的实践、経験を通じて抽象的思考を発展させるという傾向はスタールに限られたものではない。ネッケル、コンスタン、A・トックヴィルらなどのみではなく、20世紀のアロンなどにも見られる思考の形態であることを考慮すれば、それはフランス自由主義に内在する特徴とも言える。この手法を通じて展開された政治哲学の奥行き、出来栄については、個々の政治思想家による差があったとしても、フランス自由主義

とは元来政治の実践や経験から生まれた政治思想であること自体を否定することはできないだろう。

第三共和政期から戦後にかけて活躍した中道左派のエリオがジェンダーフリーなスタール論を開始したと指摘したが、彼の研究は間違いなく現状の国際的規模で発展したジェンダーフリーなスタール研究に受け継がれていった。

イタリア人研究者でスイスのローザンヌ大学で教鞭を取るB・フォンタナは*Germaine de Staël : A Political Portrait* (2016) を出版し、スタールの政治活動と政治思想を知的評伝として紹介した。¹²³ フォンタナは現代に続く、スタールの独自の民主主義体制における世論の概念について洞察力に富んだ独自の分析を紹介している。¹²⁴ その一方でフォンタナはスタールの自由な共和主義体制の議論を重視する一方1800年以後のスタールの政治思想については相対的に軽視している。その結果フォンタナはスタールの政治的自由主義の独自性が世論に宿る一方で、彼女の立憲主義的側面を含めた政治思想については全く触れていない。この点でフォンタナはチボーデやジョームのスタール研究の基本的な在り方を踏襲している。

それとは対照的に、フランス自由主義を一貫して節度のリベラリズムの立場から分析してきたルーマニア出身でアメリカのインディアナ大学で教鞭を取るA・クレイチュは*A Virtue for Courageous Mind : Moderation in French Political Thought* (2011) の中で、恐怖政治以後の穏和な共和政の時代を中心としてスタールの政治思想について論じた。とりわけその立憲主義的意味合いについて節度の観点から詳細に分析している。¹²⁵ クレイチュの「節度の自由主義思想」には戦前の教条主義者寄りの研究者の唯心論的なリベラリズムの見方に近い面があり、例えばクレイチュはチボーデと同じように、スタールの党派精神と自由の精神の対比を強調する。同時にクレイチュは「フランス自由主義の母」としてスタールの政治思想については、コンスタン、ネッケルらのコペグループとともに論じている。その結果クレイチュは政治理論なき「教条主義の母」と立憲主義的「フランス自由主義の母」を並行して論じている。

では第三共和政期の教条主義的オルレアニズムを特徴づけた「党派精神」と「寛容の精神」の対比は政治理論とは切り離された概念なのだろうか。その役割は歴史上のリベラルと反リベラルの

状況を対比的に描写することのみに限定されてしまうのだろうか。エリオはあくまで寛容の精神がフランス共和主義への政治コミットメントに依存すると主張し、中庸の精神を共和主義の政治制度論に含めた。それとは対照的に同時代のオルレアニストたちはエリオほどには政治制度に内在する形而上学的な原則にこだわらずに歴史の流れを追うプラグマティズムを重視した。そんな彼らは「中庸の精神」を論じるにあたってどのような政治思想的インプリケーションを想定したのだろうか。

この問いに対してチボーデは「フランス王政のリベラリズム、ジェネーヴの政治的、知的伝統、イギリスの憲法モデルの3つの要素が融合した政治モデル」と答えたことを指摘した。著者はこの問いに対して、スタールと教条主義者をつなげる中道の精神を中核とし、民主主義と貴族主義の精神が緩和された立憲主義、そして公私の局面を公共圏という両者を折衷させることによって構成され近代政治における世論の役割を重んじた公共圏を特徴とする政治思想について明らかにし、それをコミューナル・リベラリズムと名付けた。¹²⁶

教条主義者との関係性を重視した視点から見た政治思想家としてのスタールの独自性とは、政治権利以上に市民としての権利の保障を重視し、その前提としての社会の統一性、凝固性というテーマをより重んじた点である。彼女は国家レベルの（男子）普遍選挙については現状の社会状態においてはさらなる社会の不安定化の原因になりうると思え消極的だった。つまり彼女は政治参加という問題に強い関心を示さなかったが、それとは対照的に、異なる社会階層間の心理的絆を深めるためにまず地方行政の地域代表を選ぶことから（男子）普遍選挙を始めるべきであると説いた。

またスタールは会話の技巧と政治の実践をつなげ、それを世論形成の契機とした。つまりフランスの上流社会に特有な会話の技巧を地域行政に携わるエリート、庶民を含めた全てのフランスの男性市民の間の対話に取り入れることによって、社会、政治的利害の相違を抱える市民たちは暴力ではなく対話によって相互理解を深め、社会の統一感を強めることができると考えた。その結果地方行政の場で市民間の政治的利害を対立させ、公私の分野では決して出会うことのない市民たちがそこで物理的に顔をつき合わせ、共通の地域行政の問題について節度ある会話を取り交わすことを通

じて、感情と理性が融合した節度を通じて、礼儀正しい国語によって信頼関係を醸成していく過程こそを世論および社会的統一感の形成過程とみなした。言い換えるならスタールは会話に近代的な自己権利の追求と同時に節度やマナーを求めた。

この視点からスタールにとっての世論の本質とは政治リーダーと国民の間の道徳感情に裏付けられた社会的紐帯であり、この視点からスタールは、ナポレオン体制について市民の社会的紐帯のベースとなる道義的要素を打ち消すことによって成り立った独裁政であるとみなした。¹²⁷ 1930年代の議会制民主主義の危機から第二次世界大戦への流れの中でスタールのこの考え方に対してオルレアニストたちは強い共感を感じた。彼らは民主主義制度が存続しているからと言って自由が保障されたわけではなく、道徳感情に裏付けられた世論こそ民主主義を支える前提として市民間の社会的紐帯に影響を与えるものであると強く認識した。では翻って現代について考えた時、SNSやメディアなどを中心としたコミュニケーションのあり方は道義的要素に裏付けられるべき世論を維持しうるのだろうか。この点でスタールの政治思想は我々の時代の世論について問題定義を投げかけており、現代における自由、リベラリズムのあり方について再考を促すものであることは間違いない。

結びに代えて

本論文では、これまで関心が持たれてこなかった第三共和政期における中道派のリベラルによるスタール論について「女嫌い」の視点から分析した。穏健左派のエリオの分析には「女嫌い」が見受けられずあくまでもスタールを政治思想家として分析する一方、穏健右派でオルレアニストとして知られたファゲ、ソレル、チボーデらには「女嫌い」の傾向が見受けられた。そして彼らの偏ったスタール論が戦後のフランスにおけるスタール研究にも影響を及ぼしたことを明らかにした。

しかしながら今日フランス政治思想史の創始者として知られるチボーデは、スタールの政治思想を「女嫌い」のベールに包みつつ彼女の政治思想から実質的な着想を得たことも明らかにした。チボーデは戦間期の議会主義の危機の時代に直面した結果、彼女の党派精神の概念をファシズムと共産主義の対立に適合させ20世紀の政治文脈にも

適合しうる政治的リベラリズムの一形態とみなして、ギゾーの「国家のリベラリズム」とは異なる「教条主義的オルレアニズム」を再生させた。またチボーデ以外の中道寄りの論客も常にスタールの政治思想を念頭に置いていたことも明らかになり、スタールが第三共和政の時代にも政治的影響を及ぼし続けたことを認識する結果となった。その結果本論文は期せずして「リベラリズムが第三共和政期から1960年代までのフランスにおいて忘れ去られた存在だった」という従来の定説に反論する結果となった。¹²⁸

今後の課題としてはスタールの政治思想に着想を得た戦間期の教条主義的オルレアニズムが戦後の冷戦期を特徴付けたリベラリズムへとどのように変化していったのかについて考察を深めていきたい。

謝辞

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2932) の助成を受けたものである。大妻女子大学生活文化研究所の有形無形のサポートに深く感謝を申し上げる。また本論文を加筆修正するにあたり二人の査読者からもそれぞれ大変有益で貴重なコメントをいただいた。査読者に対しても深く感謝申し上げます。

引用文献

- [1]その直接的なきっかけはL・ジョームがフランス自由主義研究においてスタールを政治思想家として取り上げたことだった。Jaume Lucien, *L'individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Fayard, Paris, 1997. 現在「自由主義の母」という呼称がフランスで一般化しているという一例として‘On les considère aujourd’hui comme la mère et le père du libéralisme politique moderne.’ (les = Mme de Staël et Benjamin Constant) “Les amants du libéralisme politique.”
<https://www.laliberte.ch/news/les-amants-du-liberalisme-politique-397096> (2020年1月14日)
- [2]人物としてのA.ThibaudetについてはMichel Leymarie, Albert Thibaudet, *l'outsider des dedans*, Villeneuve-d'Ascq, Presses universitaires du Septentrion, 2006.
- [3]Albert Thibaudet, *Littérature française de 1789 à nos jours, Les idées politiques en France*, Editions Stock, 1936, p.54-55, p.57, “Les idées politiques de la France (1832)”, *Thibaudet : Réflexions sur la politique*,

ed. Antoine Compagnon, Robert Laffont, 2007, 157-235.

オルレアニストの歴史に関連する代表的な研究書『フランスにおける右派』においてR・レモンはスタールとオルレアニストについて次のように書いている。“La vie de société leur (=Orléanistes) est aussi indispensable qu’à Mme de Staël ; ils ne peuvent se passer de recevoir, d’accueillir, de converser. L’opposition orléaniste est une opposition de salon.”René Rémond, *Les Droites en France*, Aubier, 1956, 106.

日本の研究史においては第三共和政の『ライシテ』について論じるにあたって工藤氏もスタールやオルレアニストの問題には触れていない。工藤庸子, 『宗教 vs 国家：フランス、政教分離と市民の誕生』, 講談社現代新書, 2007.

[4]佐藤夏生, 『スタール夫人』, 清水書院, 2005, p. 205.

[5]工藤庸子, 『評伝 スタールと近代ヨーロッパ：フランス革命とナポレオン独裁を生き抜いた自由主義の母』, 東京大学出版会, 2016, 7-8.

[6]ちなみにスタールを形容するにあたっては、自由主義の母ほど一般的ではないが愛人という言葉も見受けられる。フランスの歴史雑誌 *Histoire vivante* はスタールを「政治的自由主義の愛人の1人」として紹介している。

<https://www.laliberte.ch/news/les-amants-du-liberalisme-politique-397096100> (2020年1月14日)

政治思想とは離れるがスタールの評伝にはロングセラーとして知られている『時代の愛人』というタイトルもあるJ. Christopher Herold, *Mistress to an Age : A Life of Madame de Staël*, Grove Great Lives, 2002.

[7]上野千鶴子, 『女ざらい』, 朝日文庫, 2018, p.11-12.

[8] Ibid. p.12.

[9] Ibid. p.11.

[10]立憲君主制としては1791年憲法による王政(1791年-), 復古王政(1814-), 7月王政(1830-), 共和政としては第1(1792-), 第2共和政(1848-), 帝政としては第1(1804), 第2帝政(1852)である。

[11] Philip Nord, *The Republican Moment: Struggle for Democracy in Nineteenth-Century France*, Harvard U.P., 1998.

[12] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, 219-240.

[13] Jean Isbell, *The Birth of European Romanticism: Truth and Propaganda in Staël's 'De l'Allemagne,' 1810-1813*, Cambridge University Press, 1994, 220.

[14] Takeda, *Mme de Staël and Political liberalism*, 243-280.

- [15] Christian Amalvi, “Le 14-Juillet : Du Dies irae à Jour de fête”, *Les lieux de mémoire, Quatro I : La République*, sous la direction de Pierre Nora, Gallimard, 1997, 375-423. Raymond Aron, *L’homme contre les tyrants*, Gallimard, 1946, 285.
- [16] Ibid.387.
- [17] Georges Clémenceau, 14/34, 1891年1月29日, *Archives des assemblées nationales : 1787-1958 : répertoire numérique de la série C : Archives nationales*, Jannine Charon-Bordas, Archives nationales, 1985.
- [18] Georges Pariset, *Histoire de France contemporaine*, tome III, Hachette, 1921, Georges Lefebvre, *Le Directoire*, Centre de documentation universitaire, 1943, Albert Mathiez, *Le Directoire. Du 11 brumaire an IV au 18 fructidor an V.*, Colin, 1934, François-Alphonse Aulard, *Histoire politique de la révolution française : origines et développement de la démocratie et de la République*, A.Colin, 1909.
- [19] Paul Gaultier, *Mme de Staël et Napoléon*, Plon, 1903. 武田千夏, “第三共和政したにおけるスタール夫人像 : その光と影,” *大妻比較文化*, No.15, p.45-46.
- [20] Jaume, *L’individu*, p.13-14.
- [21] Lefort, “Libéralisme et démocratie,” *Le temps présent*, Paris, Berlin, 2007, 752.
- [22]この点については本論文の後半で詳細する。
- [23] J.Jennings, “Constitutional liberalism in France : from Benjamin Constant to Alexis de Tocqueville,” Gareth Stedman Jones and Gregory Claeys (ed.) *The Cambridge History of Nineteenth-Century Political Thought*, Cambridge University Press, 2011, p.349-373.
- [24] Emile Faguet, “Mme de Staël,” *Politiques et moralistes du dix-neuvième siècle*, première série, Ancienne Librairie Lecène, Oudin et C, 1891, 122-185. Albert Sorel, *Mme de Staël*, Librairie Hachette et Cie, 1890.
- [25] Emile Faguet, “Mme de Staël,” *Revue des Deux Mondes*, 3 période, tome 83, 1887, 357-394. その後この論文はファゲの *Politiques et moralistes du dix-neuvième siècle*, première série に収められた。本論文では *Politiques et moralistes du dix-neuvième siècle* から参照する。
- [26] “l’esprit penseur, infatigablement curieux de pensée, et des pensées les plus diverses.” Ibid.123.
- [27] “C’est un personnage considérable dans l’histoire de la pensée française...On ne dit guère, sauf dans les discussions purement littéraires.” Ibid. 124.
- [28] “C’est un essai de définition de sa pensée littéraire, politique et philosophique.” Faguet, *Politiques*,” Ibid. 123.
- [29] “Elle est individualiste avant d’être libérale.” Ibid. p. 127.
- [30] “On peut l’être par raison, par considération historique, par cette idée pure, et assez sèche, que la liberté est un fait de civilisation.” Ibid. p.128.
- [31] スタールとギゾーの政治思想の相違については以下を参照されたい。Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.159-178.
- [32] “Les considérations sur l’histoire, la politique et la morale, que Mme de Staël a semées ...attireront toujours l’attention.” Faguet, *Politiques*, p.123.
- [33] “une certaine tournure d’esprit, qui n’est ni moderne ni purement du XVIII siècle, qui est de transition et de nuance pour la plupart indistincte est comme définie vaguement par ce nom plus que par tout autre. A le prendre en gros, ce n’est point si mal jugé. Mme de Staël est bien la pensée d’une époque. ...L’histoire des idées de 1780 à 1817 est dans ses œuvres. Elle n’a point ou a peu devancé. Elle n’a pas comme d’autres plus grands, rêvé d’avance, et mieux, le rêve des générations qui les devaient suivre.” Ibid. p.124-125.
- ちなみに19世紀を代表するフランス語辞典ではリベラルについてスタールの小説を引用しており、ファゲの抽象的な説明を補足する内容となっている。「鷹揚さ (libéralité) とは自由主義に関わるものである。イタリアにはこの意味での自由があると言われるがそれは政治制度に関するものではなく。それは社会の上層階級が現状の偏見に対して密やかに抵抗心を持つ状態を指す。」Littré, “Libéralité”より引用。
<https://www.littre.org/definition/liberalite>
(2020年1月14日)
- [34]スタールの党派精神と中庸の精神については <https://oll.libertyfund.org/pages/lm-stael>
- [35] Mme de Staël, Chapitre VII, “De l’esprit de parti”, “De l’influence des passions sur le bonheur des individus et des nations,” by Florence Lotterrie and Laurence Vanoflen, *Œuvres complètes, série I, Œuvres critiques*, tome I, Honoré Champion, 2008, p.221-233.
- [36] Ibid.221.
- [37] Mme de Staël, “De l’influence des passions,” p.225.
- [38] “Il faut avoir vécu contemporain d’une révolution religieuse ou politique, pour savoir quelle est la force de cette passion. Elle est la seule dont la puissance ne se démontre pas également dans tous les temps et dans tous les pays. Il faut qu’une sorte de fermentation, causée par des événements extraordinaires, développe ce sentiment, dont le germe existe toujours chez un grand nombre d’hommes, mais peut mourir avec eux

- sans qu'ils aient jamais eu l'occasion de le reconnaître." Ibid.,221.
- [39]ルソーの宗教心の議論と関連するスタールのサンチマンについては Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.47-49.
- [40] "Ce qu'on voulait, c'était moins conquérir la liberté qu'abolir la roture. Et cette impatience n'était point seulement le fait de la bourgeoisie. Le peuple l'éprouvait comme elle...avec violence." Faguet, *Politiques*, p.174.
- [41] "Ce qu'on voulait, c'était moins conquérir la liberté qu'abolir la roture. Et cette impatience n'était point seulement le fait de la bourgeoisie. Le peuple l'éprouvait comme elle...avec violence." Faguet, *Politiques*, p.174.
- [42] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.92-93.
- [43] Faguet, *Politiques*, p.174.
- [44] 伊達聖伸, 「コンコルダートから政教分離法へ」, 『よくわかるフランス近現代史』, 剣持久木(編), p. 92-95, ミネルヴァ書房, 2018 と「ライシテは市民宗教か」, 『宗教研究』, 日本宗教学会編, 2007-12, p. 531-554. 『フランスにおける脱宗教性(ライシテ)の歴史』, ジャン・ポベロ著, 三浦信孝・伊達聖伸翻訳, 白水社, 2009. 第三共和政の時代背景については次を参考にした. Arnaud-Dominique Houte, *Le triomphe de la République 1871-1914, Histoire de la France contemporaine*, vol.4, Seuil, 2014.
- [45] Sorel, *Mme de Staël*, p.197-212.
- [46] Ibid.38.
- [47] Ibid.38.
- [48] Ibid.38.
- [49] Ibid.38.
- [50] Ibid.33.
- [51] Ibid.186.
- [52] Ibid.186.
- [53] Ibid. 192-198
- [54] Ibid.198-199.
- [55] Ibid. 192.
- [56] Ibid.198-199.
- [57] Ibid.199.
- [58] Ibid.193.
- [59] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.282-301.
- [60] Albert Thibaudet, *Les idées politiques de la France*, Paris, Delamain et Boutelleau, 1932.
- [61] "Le terme *libéralisme* appartient au passé." Citation from Ian Stewart, *Raymond Aron and the Roots of the French Liberal Renaissance*, PhD thesis, the university of Manchester, 2011. p. 13. 以下も参照されたい. François Mélonio, *Tocqueville et les français* (Paris, 1993), p.261; Célestin Bouglé, "La crise du libéralisme," *Révue de métaphysique et morale*, X (1902), p.635-652.
- [62] Albert Thibaudet, *Histoire de la littérature française. II : De 1789 jusqu'à nos jours*, Stock, Delamain et Boutelleau, 1936.
- [63] Thibaudet, *Histoire de la littérature française*, p.45-55.
- [64] Thibaudet, *Les idées politiques*, p.239.
- [65] Ibid. 239.
- [66] "Une somme considérable de libéralisme religieux est passé, dans les mœurs avec la séparation de l'Eglise et de l'Etat." "L'activisme jacobin est d'ailleurs en sommeil...Il est vrai que la liberté d'enseignement reste exposée au mouvement à longue échéance de l'école unique, actuellement la plus grave menace contre le libéralisme. Le point final des vieilles luttes n'est pas encore certainement bien mis." Ibid.173.
- [67] "Quant au libéralisme politique, c'est-à-dire la forme et à la nature de liberté politique compatible avec l'état centralisé et la tradition de la monarchie administrative, qui ne sont pas libéraux, une des raisons de son silence, c'est que la République ne lui a presque plus rien laissé à désirer." Ibid.173.
- [68] "Il est cependant une troisième forme de libéralisme, à laquelle l'évolution sociale a réservé se coups les plus durs, et qui est aujourd'hui hors de combat...A l'intérieur les lois sociales, à l'extérieur le protectionnisme, l'ont exterminé." Ibid.174.
- [69] "Une seule de ces idées ne comporte pas de sectaires, est opposées par nature à l'état de secte : c'est le libéralisme. Donc des idées politiques excluent le libéralisme, et quand elles sont au pouvoir, le suppriment : c'est le cas du fascisme et du bolchevisme. Depuis la terreur et même dans les premières années du second empire, la France n'a jamais connu ces totales vacances du libéralisme. Aujourd'hui tout pays en est menacé." Ibid.238.
- [70] Ibid.237.
- [71] "un seul est libéral, c'est-à-dire se dit libéral parce qu'il est dans l'opposition. Un seul...le nationalisme est le seul parti libéral qui existe..." Thibaudet, *Les idées politiques*, p.169.
- [72] 著者はこれをギゾーの「国家のリベラリズム」と区別して「コミユナルリベラリズム」と名付けた. Takeda, "Guizot's and Rémusat's Reactionns to Considerations in 1818," *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.159-178.
- [73] "elle fut pendant un quart de siècle le général en chef ou le Napoléon de la vie des salons ...Les dames du XVIII siècle avaient régné par l'esprit. La première, Mme de Staël régna sur le sien par le génie. " Thibaudet, *Histoire de la littérature française*, p.45.
- [74] "Personne plus qu'elle ne s'est inspirée d'autrui." Ibid. 45.

- [75] “superficiel,” “un style épais” Ibid.43.50.
“Mme de Staël ayant peu de lecture et connaissant surtout les livres par ceux qui en parlaient.” Ibid. 46.
- [76] “Tout ce qu’en dit Mme de Staël c’est de la bonne information actuelle qui ne dépasse pas son temps.” Ibid.50.
- [77] “Mme de Staël, qui lisait peu l’allemand nous donne l’opinion moyenne qui s’est formée à Coppet.” Ibid.49.
- [78] ちなみにファゲはこの点について次のように書いている. “Mme de Staël est bien la pensée d’une époque. …L’histoire des idées de 1780 à 1817 est dans ses œuvres. Elle n’a point ou a peu devancé…elle a été la pleine et lumineuse conscience intellectuelle des hommes de son temps, embrassant et échauffant en elle l’âme de son époque, et ne laissant en dehors que ce qui ne pensait point.” Faguet, *Politiques*, p.124.
- [79] “Benjamin Constant, inspiré, …non sans raisons, par Mme de Staël.” Thibaudet, *Histoire de la littérature française*, p.48.
- [80] “Lecteurs, nous avons épuisé Mme de Staël, nous n’avons pas épuisé Constant.” Ibid.48. “On ferait à Benjamin Constant une place plus considérable qu’à son illustre amie.” Ibid.56.
- [81] “Suisse romande et Savoie forment par ailleurs une grande région littéraire : culture provinciale et étrangère soustraite en partie à l’influence de Paris-patricienne mais non parlementaire…que Paris, l’académie, la culture encyclopédiste et la langue analytique avaient à la fin du XVIII siècle momentanément déclassées.” Ibid.41.
- [82] “La même spiritualité protestante, la même grande destinée conjugale, la même nature ardente, généreuse, la même rayonnante vertu.” Ibid.44.
- [83] Ibid.47-49.
- [84] “C’est un de ses livres les plus importants, le testament de sa vie politique, et encore un manifeste.” Ibid.54.
- [85] “L’histoire de la littérature ne consiste pas seulement dans l’histoire des formes, mais dans l’histoire des idées formulées et agissantes : aussi faut-il voir d’un côté Mme de Staël dans cette famille de chair et d’esprit qui l’encadre, la dégage, la précède et la prolonge et de l’autre côté dans le groupe de ses amis de Coppet. Elle existe moins comme productrice d’œuvres que comme le chef de chœur et la maîtresse de maison d’un immense dialogue.” Ibid.54.
- [86] “Elle existe moins comme productrice d’œuvres que comme le chef de chœur et la maîtresse de maison d’un immense dialogue.” Ibid. 54.
- [87] “Mme de Staël, mère de la Doctrine, belle-mère du duc doctrinaire.” Ibid.54.
- [88] Ibid.54.
- [89] “Le manifeste de ce qui s’appellera dix ans plus tard l’école doctrinaire, de ce libéralisme royaliste, avec une tradition genevoise et des sympathies anglaises, qui allait arriver au pouvoir en 1830.” Ibid.54.
- [90] Ibid.54-55
- [91] Thibaudet, *Les idées politiques*, p.171-172.
- [92] “Mme de Staël et lui sont le père et la mère du libéralisme politique, ou plutôt les deux créateurs, la catégorie du sexe ne jouant pas ici d’une manière distincte.” Ibid.57.
- [93] Ibid.44.
- [94] André Jardin, *Histoire du libéralisme en France*, Hachette, Paris, 1985, p.406.
- [95] これについては先に取り上げたソレルのスタールの政治思想批判に準じる.
- [96] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.90.
- [97] “Ses études (of Broglie) ne firent que le confirmer dans une incrédulité raisonnée de tout ce qui n’était pas la doctrine de la liberté et du bonheur du plus grand nombre. Cependant son alliance avec Mme de Staël qu’il trouvait mûrie par l’âge, revenue à un vague protestantisme, initiée aux croyances métaphysiques de l’Allemagne et aux croyances morales de l’Angleterre, lui fit faire connaissance avec un ordre de pensées et de sentiments auxquels il avait été jusque là étranger.” Rémusat Ch.de, *Mémoires de ma vie*, (Paris, 1886), t.I, 280.
- [98] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, 114. Mme de Staël, *Considérations sur les principaux événements de la Révolution française*, V-IV.
- [99] Jardin, *Histoire du libéralisme*, p.198-210.
- [100] Ibid. 210.
- [101] Ibid.208.
- [102] Jacques Godechot, “Introduction” to *Considérations*, p.7.
- [103] Delon M., “Mme de Staël dans le dictionnaires du bicentenaire,” *Cahiers Staëliens*, no.42, 1990-1991, p.112.
- [104] Jaume, *L’individu effacé*, p.119-170.
- [105] Ibid. , 2-3 安藤隆穂, 『フランス自由主義の成立：公共圏の思想史』, 名古屋大学出版会, 2007, p.2-5.
- [106] Jaume, *L’individu effacé*, p.25-118.
- [107] Ibid. 58.
- [108] Ibid.25-26.
- [109] 「ジェルメーヌの文明史論がギゾー的文明史に組み込まれる時, 歴史のモラルは現実に解消される. ジェルメーヌの自由主義の核心としての公共圏の政治学は, 牙を抜かれるのである.」安藤隆穂, フランス自由主義の成立：公共圏の思想史, 名古屋大学出版, p.239.

- [110] 工藤, 『スタール夫人と近代ヨーロッパ』, p.93-97, p.108-110.
- [111] Jaume, *L'Individu*, 59-63.
- [112] Edouard Herriot, *Un ouvrage inédit de Madame de Staël : Les fragments d'écrits politiques (1799)*, Thèse présentée à la Faculté des Lettres de l'université de Paris par Edouard Herriot, Plon-Nourrit et Cie, 1904.
- [113] Takeda, *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.57-80.
- [114] Gauchet Marcel, "Madame de Staël," *Dictionnaire critique de la Révolution française*, ed. François Furet and Mona Ozouf, Flammarion, 1988, p.1053-1060.
- [115] Herriot, *Un ouvrage inédit*, p.8.
- [116] "Il faut donc que les modérés, comme parti, n'existe plus, ; que les uns rejoignent le parti aristocrate et les autres se rattachent au parti républicain, et que le gouvernement encourage les conversions mais ne les prévient jamais, qu'il soit bien répété, bien démontré qu'on ne sera jamais rien en France sans s'être montré républicain, mais républicain de la manière qui brouille avec les royalistes..."Ibid.78
- [117] "Son système politique, est en somme, un système moyen. Mme de Staël aime la métaphysique politique ; on le lui a reproché fort souvent. Mais elle y fait appel comme on fait appel à la preuve dans les sciences mathématiques pour démontrer le résultat obtenu d'autre part."Ibid.97
- [118] Ibid.97.
- [119] "Le libéralisme de Mme de Staël n'est suspect que sur deux points. Sur la question de la propriété tout d'abord. Il est certain que son amour de la République ne va pas jusqu'à lui conseiller de faire l'abandon de sa magnifique fortune ; elle prend avec chaleur la défense de la propriété toutes les fois que l'occasion s'en présente. Sur la question religieuse ensuite. Dans le curieux chapitre Des religions, il ne semble pas que son impartialité soit entière." Ibid.97-98.
- [120] "Ecrivain politique, Mme de Staël aura été l'un des penseurs les plus utiles du temps révolutionnaire."Ibid.100.
- [121] Herriot Edouard, *Aux sources de la liberté*, 1939, Paris Gallimard, p.31.
- [122] Robert Darnton, "Mme de Staël and the Mystery of the Public Will," *The New York Review of Books*, June 23, 2016, p.40.
- [123] Biancamaria Fontana, *Germaine de Staël: A Political portrait*, Princeton University Press, 2016.
- [124] この点については以下で解説した.武田千夏, 「スタール夫人と世論」, *人間生活文化研究*, No27, 2017, p.316-318.
- [125] Aurelian Craiutu, *A Virtue for Courageous Minds: Moderation in French Political Thought, 1748-1830*, Princeton University Press, Princeton, 2011, p.158-197.
- [126] Takeda, "Barante's Moment: The Advent of Communal Liberalism in 1829," *Mme de Staël and Political Liberalism*, p.179-198.
- [127] Ibid., 81-102.
- [128] 「フランス政治思想の主流はルソーとフランス革命を起源とし, それから1世紀後の第三共和政期に政体として定着した共和主義であって, 自由主義は19世紀後半から次第に追いやられ, さらに一世紀後の1980年代からようやく復権の機運にある。」三浦信孝, 「序 自由と自由主義の思想地図」三浦信孝編『自由論の討議空間—フランス・リベラリズムの系譜』勁草書房, 2010, p. 5. 宇野氏も「その後の政治的諸変動の中で, 自由主義は, 共和主義との違いを次第に顕在化させていく」とあり両者の融合よりも相違を強調した後1980年代以後の「自由主義の復権」について論じている. 宇野重規, 『政治哲学へ: 現代フランスとの対話』, 東京大学出版会, 2004, p. 182-183.

Abstract

In this article, I discuss the political implication of presenting Staël as either "the mother of liberalism" or "the mother of the doctrine", two expressions coined in 1932 by Albert Thibaudet, a prominent political scholar of the Third Republic. Thibaudet called Staël "the mother of the doctrine" when highlighting her family and social relations with the *doctrinaires*, including the duc de Broglie and "the mother of liberalism" when emphasizing the relevance of her political thought to Benjamin Constant. While the former label was important in the 1930s and in the aftermath of the WW2, the latter label took an increased importance after the 1990s within the re-emergence of studies on French liberalism. As a result, I see a tension in the way Staël was related principally with the group of *doctrinaires* in the interwar period and after 1945 and with Constant and the Coppet group in the post-cold war period.

One common point of both periods and until today, is that Staël's political thought has not been taken up frontally. Although the tendency to characterize her as "mother" within the history of political thought seems to suggest some respect for her role as a female political thinker, I argue that these expressions are in fact a misogynous strategy to sideline her from the history of political thought. This strategy is particularly clear with Thibaudet. At the same time, gender free studies on Staël also started under the Third Republic with Edouard Herriot. He dealt with an unpublished political essay of Staël, discovered at the turn of the century, before he moved on to a very successful political career with the radical party, a moderate centrist party.

To conclude, I lay main emphasis on the positive reception of Staël's political thought among *libéraux* of the Third Republic. Despite their misogynous aspects, it is undeniable that men such as Thibaudet, Herriot and Aron learned considerably from Staël's political thought, and I would like to deepen my discussion on this point in the future.

(受付日：2019年6月10日，受理日：2020年2月10日)

武田 千夏 (たけだ ちなつ)

現職：大妻女子大学比較文化学部教授

ロンドン大学博士後期課程終了。 PhD.

フランス近代史における政治，文化，思想の接点について1) スタール夫人，2) フランス自由主義思想，3) ロマン主義的旅行のあり方の3つの視点から研究している。研究の詳細については以下を参照されたい。 <https://chinatsutakeda.com/>

Main Publications/主な著書：

'Deux origines du courant libéral en France,' *Revue française d'histoire des idées politiques*, no.18, 2003, 233-258.

'On a Liberal Interpretation of the French Revolution : Mme de Staël's *Considérations sur la Révolution française*,' in Karyna Szmurlo ed., *Germaine de Staël : forging a politics of mediation*, Voltaire Foundation University of Oxford, 2011, 91-108.

Mme de Staël and Political Liberalism in France, Palgrave, 2018